



掘り立てのにんじん。

半年後、ふらりと旅に出た。向かったのは小笠原諸島の父島だった。奇しくも原発事故から3ヶ月後に「世界自然遺産」に登録された、豊かな自然が残る島だ。滞在中に台風が島を直撃、帰りの船は欠航になった。1週間に一度しか船が出ないので、向こう1週間は島にカンヅメだ。聞けば停電になる可能性もあるという。スマホの充電が切れたらどうやって時間を潰そうかしぶしぶ図書館に向かい、一冊の本を借りた。何の気なしに手に取ったのが、「わら一本の革命」だった。農薬や肥料を使わない農法について福岡正信という農家が書いた本だ。原発事故後、電力エネルギーばかりに心を奪われていたが、生き

ていく上で最も基本のエネルギー、すなわち「食べもの」すら僕は自分で作っていない。その事実が頬を張られたような気がした。自分の食べるものぐらいいは作れるようにしたい。読み終わるころには心にすっきりタネをまかれていた。宿泊していたバンガローには共同のキッチンがあり、食器用石鹸が置かれていた。「なんでこんなに油が落ちない洗剤を使ってるんだ？」と困惑するほどの代物だった。自宅で使っていた、一滴で弾けるように油汚れが落ちる合成洗剤とは雲泥の差だ。石鹸の脇に置いてあったパンフレットが目についた。パンフレットには、合成洗剤に含まれる合成界面活性剤は自然の中で分解されず、海の生きものや水質に影響を及ぼすということが書かれていた。パンガローは海のほど近くにあって、自分が使っているのが海に流れたらどうなるか、彼らはよく理解していた。合成界面活性剤は便利でもとても安価だ。しかしこの「安くて便利なもの」の背景に僕は無頓



青森県青森市雲谷(もや)地区で農業を営む、「雲谷ト森山農園」の森山知也さん(45)。

六本木の雑居ビルの一室で撮影をしていた。突然、地面が激しく揺れた。急いでビルを飛び出すと、目の前の首都高と全日空ホテルがパカミたいに揺れていた。「このまま世界は終わるのかな……」。グニャグニャと揺れるコンクリートの上に立ち尽くした。翌日、福島第一原発一号機が爆発した。薄水色をした建屋の壁が吹っ飛び、無色透明の放射性物質が撒き散らされた。渋谷のサブライムで食い入るようにテレビを見た。脳味噌をひっくり返されたような衝撃だった。「あれは、僕がのらりくらし使っていた電気だ」。何となく原発には反対だった。だが僕は一体、何に反対していたんだろう。実際は反対どころか、あの電気を使い、金を払ってあの発電所を支えていた。なんて無責任なことをしたんだ。僕は爆発させちゃいけないものを爆発させてしまった……。8年続けた映像制作の仕事辞めた。仕事を含め、生き方を改めたいと思った。便利で快適な生活は、一枚